

学校と地域がつくる 希望への学びあい

学校ESD(持続発展教育)ガイドブック

多摩市版



平成21年度多摩市ESD研修会の成果より

多摩市教育委員会
NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)

2050年の大人びくろ

持続発展教育 (ESD) の推進に向けて

学校の先生や保護者の方は、子どもたちの「何のために学ぶのか?」「どうして地域の学校で学ぶのか?」という問いに答えを用意しているでしょうか?

多摩市教育委員会では、この問いに対して「多摩市教育振興プラン——人と学びを未来につなぐ基本計画——」を策定しました。その中の重要な教育施策の一つが、全校における持続発展教育 (ESD) の導入と、ユネスコスクールへの登録です。

多摩市が ESD に取り組む理由をあげます。現代社会は、地球規模の環境破壊や貧困や紛争などの問題や、一方で多摩という地域に目を向けても急速に高齢化を迎えようとしているニュータウンの問題など、持続不可能な問題が山積です。将来日本、そして多摩市で暮らす子どもたちには、その延長線上の社会において、自らの考えを持って、新しい社会秩序をつくり上げることが求められるのです。だからこそ、地球的な視野で、身近な暮らしを変え、地域に参加する市民を育成するための教育が必要です。その教育こそが ESD です。

一方、今子どもたち置かれている状況に目を向けても、聞く力、考える力、問題解決する力、表現する力、学ぶ意欲などの低下が指摘されています。また不登校、いじめ、学級崩壊など学校・家庭が抱える問題や、フリーター、ニート、衝動的犯罪など地域・社会の抱える問題（特に青少年）

など多くの課題があります。それらの原因のひとつとして、子どもたちが自然・家族・地域・社会から隔絶され、実体験や多様な立場の人とのコミュニケーションが不足していることなどが考えられます。体験や関係性を補完する ESD は、まさにそのような子どもたちの諸問題の解決策としても有効です。事実、ESD を実践している先進校からは、ESD の実践により子どもたちの学習意欲の向上や、友達同士、地域住民との関係性が向上したという報告もあがっています。

このように、すべての学校が地域と一体になって ESD に取り組むことで、子どもたちの未来を創造する能力を育むことができます。そしてさらには地域住民や保護者の意識にも変化が生まれ、地域社会をも変えていける可能性があるのではないのでしょうか。

全校への ESD 導入に先駆けて、多摩市では平成 21 年度、文部科学省の日本／ユネスコパートナーシップ事業として、「多摩市 ESD (持続発展教育) 研修事業」を NPO との連携により実施しました。

本冊子は、本年度の研修事業の成果を踏まえ、ESD について皆さんと一緒に考えるためのガイドブックです。ぜひこのガイドブックを参考としていただきながら、日ごろの授業実践から始めましょう。

ESD とは？

ESD とは、持続発展教育 (Education for Sustainable Development) の略称です。2002 年のヨハネスブルグサミット (持続可能な開発に関する世界首脳会議) で、日本は、持続可能な社会を実現するために世界中で人づくりに取り組むことを提案しました。これを受けて開始されたのが、「国連 ESD の 10 年」(2005 年～2014 年) です。

ESD は、学校教育、学校外教育を問わず、国際機関、各国政府、NGO、企業等あらゆる主体間で連携を図りながら、教育・啓発活動を推進する必要があるといわれています。また、その領域は、環境、福祉、平和、開発、人権、国際理解、貧困、経済、文化の継承、など多岐にわたるものです。

わが国の ESD 実施計画では、ESD の目指すべきは、「地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる」よう個々人を育成し、意識と行動を変革することとされています。

「新学習指導要領」でも、総合的な学習の時間をはじめ、社会、理科、技術家庭科などにおいて、「持続発展教育」の視点が導入されています。

生きる力とは、問題解決のスキルを育むこと

なぜ今、ESDなのか

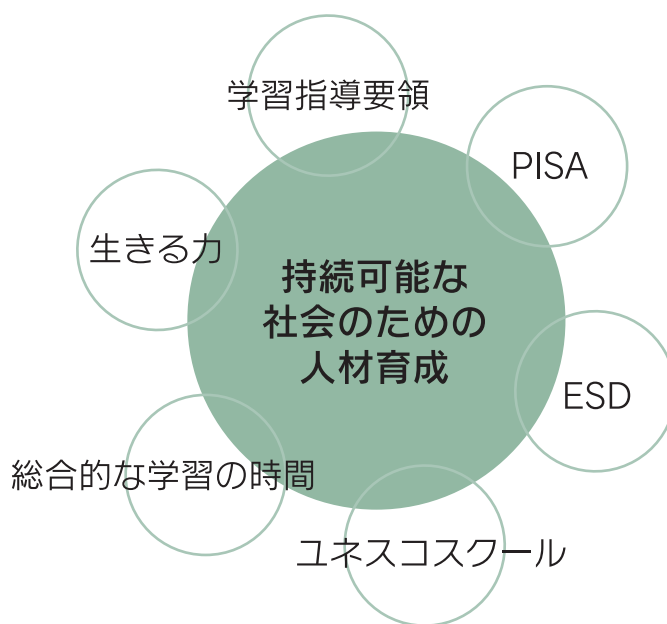
多摩市立南鶴牧小学校 校長 棚橋 乾

温暖化をはじめとする環境問題の影響が地球規模で広がっています。21世紀を担う人材には、どのような資質・能力が必要なのでしょうか。「第15回気候変動枠組条約締約国会議 COP15^(*)」の会議に見られるように、環境問題への危機意識はあっても、国家間の駆け引きや経済問題などがあり、すべての国が積極的に温暖化対策を進めるような状況ではありません。しかし、持続可能な社会をつくるための取り組みは、地球環境や我々の生活を守る上で必要です。そこで、取り組みの一つとして持続発展教育（ESD）が必要となってきます。

ESDの目的は、「環境問題や人権問題、経済問題など、複雑に絡んだ現代社会の問題に取り組む意欲と能力をもった人材の育成」にあります。この目的と、新学習指導要領の方針やOECDのキーコンピテンシー、PISA学力到達度調査等は深い関わりがあります。PISAはキーコンピテンシー（課題対応に必要な能力）を測るために、問

題解決力を真の学力として調査したものです。学力低下論のきっかけとなったPISAショックは、学習指導要領の改訂にも影響しました。そして、「生きる力」の理念や「総合的な学習の時間」の目標では、「問題を解決する資質や能力を育成するとともに、問題の解決や探求活動に主体的に取り組む態度を育てる」とあります。このように複雑な課題を乗り越えて解決につなげる問題解決の力（思考力、判断力、表現力）は、これから社会を担う子ども達に身につけさせなくてはならない力と言えるでしょう。

また、課題探求型の学びは、子どもたちの学習意欲が高まるという報告もあります。子ども達がさまざまな問題を解決するために、学習することの意味とよこびを実感することが、本物の学力向上と言えるのではないのでしょうか。限られた時間枠の中だからこそ、総合的な学習や特別活動と教科学習を連動させながら、ESDを通じて豊かな未来への学びを創造していきましょう。



(*) COP15：第15回気候変動枠組条約締約国会議の略称。2009年12月7日～18日、デンマーク・コペンハーゲンで開催された、温室効果ガス排出規制に関する国際的な合意形成を主な目的とした国際会議。

内在する力を引き出し、出会わせる

ESDの視点とそのアプローチ

エコ・コミュニケーションセンター 代表 森 良

今回の多摩市ESD研修会で私たちが一番大切にすることは、外から持ち込むことではなく、今あるもの、今やっていることを大切に、教員、地域の活動実践者の経験と知恵を結合し、発展を導き出すことでした。つまり、地域と人から必要なものを引き出し、出会わせ、相互作用による学びのプロセスをつくることです。今回の研修を通じ、あらためて確認された、学校でESDを進めるための基本的視点とそのアプローチ方法について紹介したいと思います。

つながりに気づき、つながりを築く…… ESDの視点

第一に重要なのは、ホリスティック（包括的、全関連的）な見方です。私たち人間は、自然のつながり（生態系の一員であること）と社会のつながり（地球社会、地域社会の一員であること）によって生かされています。このつながりに気づき、つながりを豊かなものにしていけることが大切です。

わたしたちの生活は、地域の固有の自然（生態系や生物多様性）、社会、文化に根ざしていると同時に、世界とつながっています。衣食住、エネルギー、情報とどれをとってみてもそれは明らかです。ということは、自分たちの地域や生活が、世界の持続不可能な動き（戦争、貧困、差別と抑圧、環境破壊など）にほんろうされないために、そのつながりのありようや影響などをよく吟味し、どうあるべきかを構想できる力をつけることが必要になります。そうした力をつけるためにESDが求められるようになったのです。

それは、自ら地域の自然や大地にかかわり、地域の人（地域にいる国際的な人をも含む）にかかわり、本物とかかわることによって育まれます。かかわるということは、必ずかかわる対象から反応が返ってくることを意味します。それによって私たちは学び成長するのです。言語を話す能力や計算する能力はもともと一人ひとりの子どもの中

に宿されており、親、まわりの大人、教師からの刺激によってそれは花開いてゆきます。

持続可能な社会を築いていこうとすると環境と経済、社会、文化、価値を切り離すことはできません。「お金が第一」という価値が心を支配しているとき、自然も人間関係も全てお金によって判断する人間になってしまいます。

環境、経済、社会のバランスをつくるためには、社会のしくみを変えていくための意思を育て、持続可能な未来を描く力や、多様な人たちと一緒に協力しあったり話しあったりしながらそのような取組を進められるようなスキルが必要です。

したがって第二の視点として、ESDは価値やスキルを養うものなのです。自分を大切に思う気持ち（自己肯定感情）を育むことから出発し、他者とコミュニケーションできること、それによって他者と協力して働くことを学ぶ。そうすれば、社会の課題に立ち向かい、世界を構造的に理解し、持続可能性、公正、寛容などの世界を理解する基本概念を身につけることができます。それらは、合意形成や意思決定という社会の変革への参加の基礎となります。

そして第三に大切な視点として、ESDはそのような教育や活動を通じて、子どもたちの社会参加や行動につながるものだということです。



自分探しの旅をサポートする…… ESDのアプローチ

教育とは自分探しの旅だといいます。人間は一人では生きられず、自然や他者とのつながりの中で生かされていると既に述べました。とすれば、自分探しとは、自分をめぐるつながり探しの旅であると言い換えることができます。だから実感が大切なのです。おもしろそうだ、自分にとって大事そうだ、やってみたらできた、成果があった、自分だってできる、人に役立てるという実感です。

「子どもの興味・関心から」とはよく言われることですが、それは天から降ってくるわけではありません。教師の揺さぶり、そそのかし、励ましが必要です。そして、子どもの反応に耳を傾けることです。何か体験したら必ずふりかえりを行い、気づきや発見を引き出します。その中に、次に体験し、追究していきたい課題があります。それを見出す手助けをすること。答えを教えるのではなく、一緒に答えの導き出し方を考えること（共同研究）が重要です。

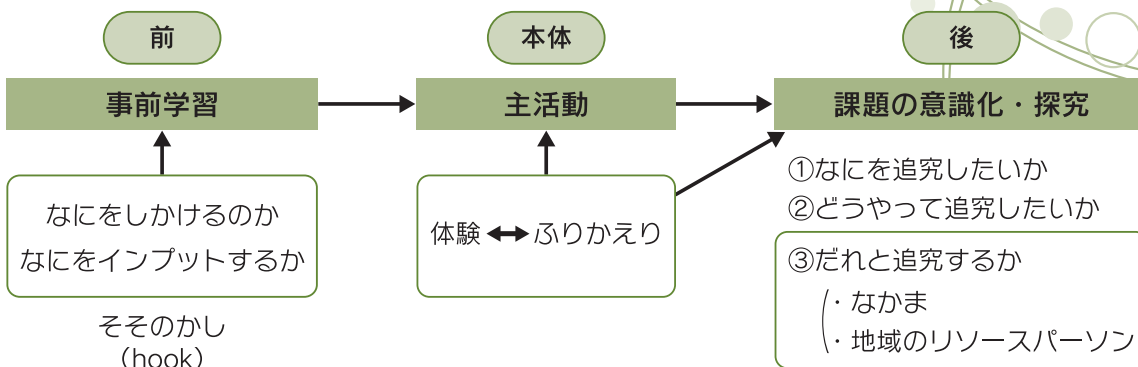
そのときに注意したいことは、子どもたちの新鮮な気づき、粹にはまらない反応を抑圧しないことです。たとえ、それがあらかじめ設定したテーマや枠組と一見関係がないように見えても、それを切り捨てたり無視したりすることなく、ていねいにひろい、共に展開のしかたを見つけていくことが大切です。子どもたちのフィードバックに誠実に寄り添うことが、子どもたちの学習意欲を高め、大きな効果をあげるからです。

また、探求型の授業・活動では、動き出した子どもの興味・関心を膨らませる本物との出会いが

重要です。本物とは、地域の人（農林漁業者、商工業者、NPO、行政職員、施設の学芸員等の専門家、郷土史家、お坊さん、宮司さんなどなど）であり、しごとであり、行事であり、様々なもの、ことです。

できれば、計画段階からこうした方たちに相談に乗ってもらえば余計な回り道をしなくてもすむでしょう。もちろん発表、評価の会も一緒に行い、大人も子どもも一緒に学びあえるといよいでしょう。

このように地域を巻き込み、地域の教育を担う主体としていくことによって、教員が異動してしまっても学校での営みが継続的に発展していくことになります。地域の持続可能性を保障するベースとなるのが地域での教育の持続可能性であることを考えると、このことは極めて重要です。そして、地域が教材となることによって、地域を知り、過去と現在に踏まえた地域の未来を展望できるようになるのです。



〔図：自立的な学びのサイクルをつくる〕

「食」の学びは、「いのち」のつながりを学ぶこと

小学校編

今行っている「活動」をESDへ

平成21年度、日本／ユネスコパートナーシップ事業のひとつとして、平成21年11月～平成22年2月に渡って5回の連続講座でESD（持続発展教育）研修会を実施しました。これから紹介する授業プランは、その研修に参加した先生と地域のNPOの方々とグループワークから生まれたものです。

この研修では、ESDとしてまったく新しいことをはじめるのではなく、ESDの視点で見直してみることを重視しました。

授業プラン：「なぜ食べ物を大切にしなければいけないか」

（領域：農業体験・食育 対象：小学3～4年）

ねらい

- ・残菜から土づくりや農作業など、食や命の循環の実体験を通じ、食に対する豊かな価値観を育む。
- ・社会の課題に目を向け（世界の食料事情、食べ残し、生産流通など）自分たちができることを実践する。
- ・地域の人々と出会い、地域の文化・歴史を知ること、郷土への愛着を育むとともに、地域への関わりを基礎を育む。

学習の概要

多くの学校が取り組んでいる食育や農業体験を、ESD的な視点で組み立て直しました。給食の残菜調べからはじまり、残菜による土づくり、野菜づくりなどを地域のNPOや農家の方と取り組みます。さらに社会科の「地域の歴史」などと関連付けながら、郷土料理「多摩そば」づくりを通して、地域の歴史と食の関係を掘り下げます。そして学習は世界の食料事情へと発展し、途上国と自分たちの暮らしの違いとつながりを学び、自分たちにできることに取り組みます。子どもたちは身近な「食」をキーワードに、世界にある不平等や、環境のこと、社会のこと、経済のこと、地域のこと、そして私たちが多くの命のつながりの中で生きていることを、1年以上かけて総合的に学んでいきます。

協力者、共同実施者

地域の農家の方、多摩そばづくりを知っている地域の方、土づくりや野菜づくりに詳しいNPOの方、途上国の事情に詳しいNPOや専門家、栄養士・栄養教諭、保護者

これまでの農業体験や食育にプラスした“ESDの視点”

1. 単なる体験に終わらず、自分達の住む地域や暮らしとの関係を結びつけながら、その後の食をめぐる探求的な学習へと導く
2. 食を中心としたさまざまな体験と探求を通じて、課題解決的なスキルを育む
 - ・自分達の力で野菜をつくるためにはどうすればいいのか
 - ・地域の食文化を守る、伝えるにはどうすればいいのか
 - ・食にまつわる身近な問題（残菜、安全、健康など）をどう解決すればいいのか
 - ・途上国の現状に私たちはどうすればいいのか
3. 地域の人たちやNPO、関係機関などと継続的に取り組み、また学習を通じて考えた家族や地域への「食の提案」などを通じて、地域との関係性を育む





学習の流れ

実施 時期	活動名 (ステップ)	ねらい	概要
3 年	1 学期	1 学校の残菜調べ ＜社会＞ 「市内めぐり」 「多摩市の農業」	給食の残菜調べから、自分たちの「食」について考えさせる。 ・市内めぐりで給食センターの見学をし、給食が作られる過程や残菜の実態を知る。 ・給食の残菜調べをする。 ・残さないために、どうしたらよいかを考える。 ・生産農家へ見学に行く。 ・残菜の利用方法を考える。
		2 残菜から土（堆肥） づくりをしてみよう ＜総合＞	食べ物（物）を粗末にしない心情を養う。 ・ゲストティチャーから堆肥づくりを教えてもらう。 ・計画を立て、実践する。 ・堆肥にできるからといって残してもいいということではないことは押さえる。
		3 おいしい野菜を 育てよう ＜理科＞ 「たねをまこう」 「植物の育ち方」	自分たちの食べ物について関心を持ち、主体的に野菜づくりに取り組ませる。 ・食料（野菜）を生産にはどうしたらいいかを調べる。 ・ゲストティチャーから野菜づくりを教えてもらう。 ・夏野菜の栽培に取り組む。
	2 学期 ～ 3 学期	4 郷土の食べ物を 調べよう ＜社会＞ 「地域をしらべよう」	社会科の地域調べで郷土の食べ物についても調べる。 昔の多摩市の食料事情を知る。 ・ゲストティチャーから地域の昔の様子や文化、食事について教えてもらう。
		5 おいしく食べよう (中間発表) ＜総合＞	郷土料理「多摩そば」づくりに取り組ませ、保護者や地域の人に成果を伝える。 ・収穫した野菜を使って、伝統的な「多摩そば」づくりに挑戦し、おうちの人やお世話になった方へ振舞う。 ・食の調べ学習の成果として、食に関する問題意識と、それまでの取組を中間発表する。
		6 冬野菜や小麦を 育てよう ＜総合＞	「多摩そば」の原材料づくりに取り組ませる。 ・地域の農業の特徴を知り、小麦づくりについてゲストティチャーから教えてもらう。
4 年	1 学期	7 小麦を収穫しよう ＜理科＞ 「季節と植物の様子」	小麦の製造過程を体験しながら、水の少なかった昔の多摩の様子を実感する。 ・小麦を収穫し、小麦粉に加工する。
		8 「多摩そば」を 作ろう ＜総合＞	「多摩そば」づくりの活動を通して、地域の文化を3年生に伝える。 ・昔ながらの「多摩そば」づくりに取り組む（3年生と）。
		9 「食」について 考えよう ＜総合＞	世界の食料事情を知り、「食」について興味関心をもたせる。 食にかかわる課題について意識をもたせる。 ・世界の中には、生きるために最優先される「食料」がなく、栄養失調に苦しんでいる子どもたちがいることを知る。 ・味の違いや安全性、食料問題等、小麦をめぐる課題について考える。 ・「食」についてこれからも意識していくようにさせる。

今行っている「活動」をESDへ

ESD（持続発展教育）研修会の目的は、参加した教員が「ESD」の視点と意義を学ぶこと、すでに実践している授業を ESD 的に発展するための“視点”と“手法”を学ぶこと、そして学校の ESD を支える地域とのつながりを強化するという3点でした。中学部では、職場体験をテーマに「ESDの視点」を加えたプランづくりに取り組みました。

授業プラン：「ESD 的職場体験」

（領域：職場体験 対象：中学1～2年）

ねらい

- ・ これまでは、どちらかといえば受け身姿勢で職場体験を行っていたのに対し、生徒側から事業所へ積極的に関わる。
- ・ 社会的な課題（環境や福祉など）を地域の事業所の実践を通じて、身近な取り組みとしてとらえ、また自分達にもできる行動や提案を考え、社会的課題の解決スキルを育む。
- ・ 体験後も地域や事業所への提案や還元を通じて、継続的な関係性を育む。

学習の概要

多摩市ではすべての中学校で行われている職場体験。この5日間の体験に、その仕事につながる社会の課題への取り組みを学ぶ視点を加えました。例えば「環境」をテーマにした場合、事前学習で環境 NPO や企業の協力を得て、環境問題や企業の環境への取り組みについて学びます。そして各職場で仕事を体験するとともに、各職場の環境への取り組みにも参加、またインタビューを通して、大人たちの考えや苦労を知る。体験後には、各職場の取り組みを共有した上で、社会のために何が必要かを考え、自分たちができること、各職場でできることを話し合い、地域や職場への提案につなげます。

協力者、共同実施者

地域の事業者、テーマに沿った NPO

これまでの職場体験にプラスした“ESDの視点”

1. 単なる職場体験に終わらず、自分達のくらしの課題に対し、どのように取り組んでいるか学ぶことで、仕事とはお金を稼ぐだけではなく、社会に貢献することで対価を得ることだという深い意味での仕事を考える機会とする。
2. 社会的課題に対する地域の大人たちの取り組みを学び、また自分達でできる課題解決策を創造することで、社会的課題に対する解決スキルを育む。
3. 地域の人たちや NPO、関係機関などと継続的に取り組み、また学習を通じて創造した「提案」を通じて、地域との関係性を育む。



プラスした活動

テーマの例：地域への貢献

- ★職業調べの際に、「職種と暮らしやすい地域のつながり」を項目に入れる。
- ★企業が取り組んでいる福祉活動や誰もが暮らしやすい地域のためにどんな取り組みをしているか調べる。
- ★企業の担当者を招き、CSR^(*)活動について講義してもらう。

従来の活動

事前学習

オリエンテーション
職業調べ
自己分析
マナー学習

プラスした活動

テーマの例：環境

- ★職業調べの際に、「職種と環境の繋がり」を項目に入れる。
- ★企業が取り組んでいるリサイクル活動やゴミ減量の取り組みを調べる。
- ★企業の担当者を招き、エコ活動について講義してもらう。

- ☆体験先の事業所において、地域の人暮らしやすいための工夫を確認する。
- ☆多くの職業自体が、地域のくらしを支えるためになっていることも実感する。
- ☆さらに、その仕事を通じて助けられている人たちへインタビューをする。

職場体験中

仕事の手伝い
接客
掃除

- ★体験先の事業所において、実際行われているゴミ分別作業やリサイクル活動を確認する。
- ★逆にその職業を通じて、環境へ影響を与えていることやなぜそのようなことが起こるのかをヒアリングする。

- ★事業所が地域の人のためにしている取り組みや地域の人の意見をまとめ発表する。
- ★地域の人意見を元に、改善の提案などを考える。
- ★企業や体験先が取り組んでいる活動をヒントに、自分たちができる取り組みを考える。
- ★NPOをゲストに招きアドバイスをもらう。
- ★体験先の取り組みの優れた点を評価し、またさらなる提案を伝える。
- ★提案の反応やその後の経過を共有する。

事後学習

新聞作成
お礼状書き
体験成果の発表
(ポスターセッション・
プレゼンテーション等)

- ★体験先の事業所が行っている環境対策をまとめ、発表する。
- ★体験職種で実行できそうな環境対策を考える。
- ★企業や体験先が取り組んでいるリサイクル活動をヒントに、自分たちができる取り組みを考える。
- ★環境NPOをゲストに招き、環境に対する提案についてアドバイスをもらう。
- ★体験先の取り組みの優れた点を評価し、またさらなる提案を伝える。
- ★提案の反応やその後の経過を共有する。

(*) CSR：企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility) の略省。

ESD的な授業を大切なこと、

ESDの実践に正解は無いでしょう。環境などがあります。ここでは、平成先生たちが、研修を通じて得た“ESD実

「自分たちだけで作ろうとしないで地域やボランティアの方、行政の方を頼ることも、色々な方法を生む力になる」

「日常的な子どもの気づきや意識を大切にする」

「子ども自身が自分の考えの変化に気づき、持続可能な社会の一構成員となる意識付けを常に行うこと」

「考えて解決するプロセス」

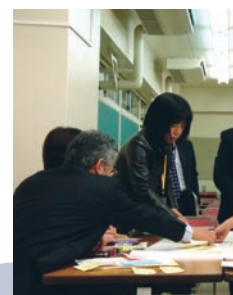
わたしが感じたESDで大切にしたいこと

「全教科、活動でESDの意識を持って行く」

「自分自身がグローバルでホリスティックな見方をしていること（広い視野に立つために他領域の人々と交流を持つようにする）」

「子どもたちにどんな力をつけたいのか、常にねらいを忘れないで進める」

「できるだけ本物を」

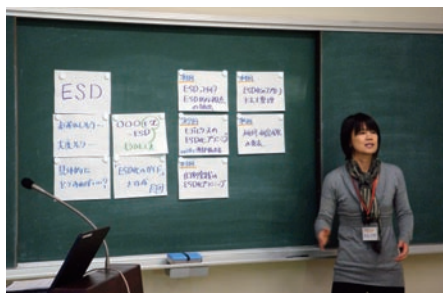


平成21年度 多摩市ESD研修会 実施概要

- 第1回 11月12日 ● ESDの基礎を学び、ESD的な学校の活動を出しあう
- 第2回 11月30日 ● ESDの視点で、授業・活動の発展に向けたアイデアを出しあう
- 第3回 12月11日 ● 小中学校それぞれでモデルプランをつくる
- 第4回 1月18日 ● ESDの視点を再整理し、モデルプランをブラッシュアップする
- 第5回 2月19日 ● 研修の成果を発表する（研究主任研修会併設）

進めるときに、必要なこと

しかし、より効果的な方法や、必要な21年度の多摩市ESD研修会に参加した「実践のヒント」をいくつかご紹介します。



「講師や人材の確保、予算の確保、企業へのESD活動への理解と協力の申請（コーディネーター制度、人材バンク）」

「現在あるものをどう生かし、工夫することによってESD的なものにしていくか」

「総合的な学習の時間だけでは不可能。道徳、学活、教科といった学校全体での協力が必要不可欠」

わたしが感じたESDに必要なこと

「時間。色々なすばらしい案がたくさん出るのに、ふと現実に戻ると、そんなにできるのか？と考えってしまう」

「まだ十分ESDについて理解できたとは思っていません。日頃からESDのことを頭の片隅において、日々の授業や職務に取り組んでいくべきだと感じました」

「地域の人やコーディネーターの人たちとの連携・協働」

研修参加者のふりかえりより

- <講師> NPO法人エコ・コミュニケーションセンター 森 良、東愛宕中学校 校長 富田広、南鶴牧小学校 校長 棚橋乾
NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J） 村上千里、佐々木雅一
- <地域協力者> 多摩市民環境会議 清水武志朗、井上寿一、まちの生ごみ活かし隊 佐藤美千代、杉並区学校教育コーディネーター 手塚佳代子
- <研修参加者> (中学部) 多摩永山中学校 酒井淳、鶴牧中学校 土方美和子、東愛宕中学校 齊木信朗、和田中学校 吉浦和孝、聖ヶ丘中学校 返田豊美、多摩中学校 佐久間康弘
(小学部) 北諏訪小学校 阿閉暢子、北諏訪小学校 佐藤智彦、北諏訪小学校 佐藤裕、連光寺小学校 松本純子、聖ヶ丘小学校 長谷川千尋、南豊ヶ丘小学校 川村康昭、栄養教諭 早乙女理恵 (敬称略)

放置自転車＋アフリカーII行動につながる学び

ESDに取り組む現場から… 1

松山市立新玉小学校 + NPO 法人えひめグローバルネットワーク

えひめグローバルネットワークでは、松山市の「放置自転車＝身近な社会問題」と、当団体が支援する「モザンビーク＝国際協力活動」をつなげたESDの実践に取り組んでいます。市内の新玉小学校の6年生の総合の時間では、わたしたちNPOと先生、市職員と一緒に、この活動への参加を軸に、年間を通じてモザンビークについて学び、自分たちにできることを実践する「学び×実践的活動」の授業を協働で進めています。

3年目を迎えた今年度は、「放置自転車の現状調べ」、「モザンビーク大使夫妻との交流」、「自転車磨き」、「支援物資の輸送」、「モザンビークの子どもたちとの手紙の交換」、「アフリカンキャンプ」、「できることの実践」、「メッセまつやまでの発表」といった年間スケジュールで展開しました。

支援物資の輸送では、保管所から放置自転車を譲り受け、手を真っ黒にして、噴き出す汗を拭くこともなく、一生懸命自転車を磨きました。どの子にも「自分たちがしている」という充実感がみなぎっていました。この作業は単なる輸送作業ではなく、大量生産・大量消費社会の中で物があふれている日本とモザンビークを比較しながら、世界の「貧困問題」や「格差社会」への気づきの場でした。

メッセまつやま2010では、学習の締めくくりとして「できることの実践」を発表しました。違法で迷惑な駐輪を止めよう！という呼びかけのポスターを作成して実際に市中で張り出す活動や、コミュニティセンターや近隣のスーパーなどに協

力を求め、行った途上国支援のための募金や支援物資の収集など、子どもたちの思いのこもった取り組みを発表しました。

新玉小学校の児童は、普段の暮らしの中にある課題の多層性、自分・地域・世界のつながり、そして、自分自身に「関わろう、協力して発信しようとする“力”」が内在していることに気づき、内なる輝きが顔の表情に表れてきました。私もこのプロセスの中で「こうなったらいいなと思うような未来」を子どもたちとともに描き、その実現のために必要な「人や未来を信じる力」を鍛えてもらいました。

これからも、ESDがたくさんの人と人のつながり、人とモノのつきあい方を気づかせ、「持続可能な未来って何？」と振り向かせることができるキーワードとなって日本中で広まることを願っています。

(えひめグローバルネットワーク 竹内よし子)



モザンビーク大使夫妻を迎えた新玉小学校児童。日本とモザンビークの友情を描いた絵は、放置自転車と共にモザンビークに送られた。



新玉小学校児童のこぼ

(1年間の振り返りとして)

「モザンビークの子どもたちと手紙の交換をしたことが心に残った」「モザンビークの人たちのために、どうことをしたらいいのか考えた」「自分だけおなか一杯ご飯を食べている、それだけでいいのか疑問に思った」「6年生までは松山市・愛媛県・日本のことしか知らなかったがこの1年で世界のつながりがわかった」「ゴミや放置自転車など地域のことが、日本・モザンビーク＝国と国までつながったのだと思います」「一歩下がって(＝視点を変えて)見る力がついた」「協力できることはやろう、と思えるようになった」

ESDに取り組む現場から… 2

新宿区立大久保小学校 + 新宿区、地域の人たち

新宿区立大久保小学校は在校生のほぼ60%が外国人、深夜まで働く親とのすれ違いやいわれの無い差別など、子どもたちにとって環境は必ずしも優しくありません。同校の善元幸夫先生は、こうした中で、教育にいったい何ができるのかを考え続け、社会科や総合の授業ばかりでなく、すべての科目で、子どもが主人公となって学ぶ、ユニークな授業を展開しています。ここでは3年生の総合の時間での地域学習について紹介します。

子どもたちはまず調べたいテーマを探しに、タウンウォッチングにでかけ、ゴミ、バリアフリー、放置自転車など、5つのテーマを見つけてきました。授業では5つすべてを取り上げたのですが、正門前にある閉鎖中の小泉八雲公園もその一つでした。

子どもたちは公園が閉鎖されていた謎を調査するため、近所の人や市の土木課の職員に話を聞き、ホームレス対策として公園の工事計画が進んでいることを知り、大久保通り沿いの家やクラスの生徒の父母など25人からも意見を聞きました。

当初、自分たちの利害だけで「ホームレスが来ない公園がいい」と言っていた子どもたちも、いろいろな立場のいろいろな人の意見に触れて、次第にホームレスの人びとについて深く考えるようになっていきました。

先生と子どもたちはじっくりと話し合い、たどり着いたのは、「ホームレスの人を公園から追い出しても問題は解決しない」「ホームレスの人の家を作る」「ホームレスの人が働けるようにする」ということでした。最初は「きれいな公園」「いつでも遊べる公園」のためにホームレスを排除することしか考えなかった子どもたちだが、「自分たちだけが気持ちいい公園でいいのか」「この地域に暮らす人みんなにとっていい公園とは」と、次第に視野を広げる中で、とうとうそこまで想像力が届くようになったのです。

小学3年生にホームレスの家を建てることは出来ません。仕事を探してくることも出来ないでしょう。しかし、社会は変えられる、変えなければならないということを学んだ意味は、どれほど深く貴重なことでしょうか。まして排除の論理は、外国籍を持つ多くの児童自身にも向けられるかもしれないのです。



子どもたちの街への思いが刻まれた公園のモニュメント

その後さらに学習は発展し、7項目にわたる「みんなで考えよう 私たちの公園——レフカダグループからのおねがい」をまとめ、区の土木課の職員へ要望として伝えられました。その結果、子どもたち自身が公園の花壇に花を植えることや、子どもたちの手づくりのモニュメントを設置することについて市の了承を得ることができたのです。

3学期には、発表会をかねて、地域の代表と区役所の人を呼んで大久保サミットを開催し、「この街をこうしたい」という子どもたちの計画が真剣に討議されました。会議の最後に、子どもたちが街に寄せる思いを共同文という形でまとめ、モニュメントの基部に碑文として刻まれました。

「結果を私たち教師が導かないことは重要です。私は『総合の時間の全体計画なんか立てるな』と言っています。いままではゴールに着くための教育をやっていたけれど、ゴールに着くまでの子どもたち一人ひとりの学びのプロセスが大事。知識を教えるのではなく“学び方”を教える。何を学ぶかは一人ひとりみんな違う。その学びの軌跡を“カリキュラム”というんです。教師は教材を開発し、子どもたちの学びを支援していくのが役割です。」善元先生のこの言葉がESDにとって大切な視点を浮き彫りにしています。



「参加型まちづくり」に取り組む

あなたもESDの実践者

ESDは概念的で難しい、とよく言われます。しかしESDは特別なものではなく、ESD的な授業や活動は、すでに学校でたくさん実践されています。多摩市ESD研修事業（研修の内容は4ページ参照）では、参加した先生たちが「ESD的って何？」をとらえ直すことから始めました。以下は先生たちの議論から、「ESD的」な要素をいくつかピックアップしたものです。皆さまが「ESDとは？」を考える際の、ひとつの材料としてご紹介します。

ESD的視点のチェックリスト

こんな目的意識をもっています

- ☐ さまざまな人の立場や意見を尊重し、協力しながら物事を解決していける人を育てる
- ☐ 地域や社会に積極的に関わるような、地域社会の担い手を育てる
- ☐ さまざまな問題が山積する社会を持続可能に変えるような未来の担い手を育てる

こんなテーマの授業や活動をしています

- ☐ 人と人のつながり：命や人間の尊厳の大切さ、多様性の尊重
- ☐ 人と自然のつながり：地域の自然とくらし・産業・文化、資源の有限性や循環
- ☐ 人と社会のつながり：貧困や人権・平和の問題、私たちのくらしと世界とのつながり

こんな方法を大切にしています

- ☐ 五感を使う、本物を体験する
- ☐ 子どもの主体性を尊重し、それぞれの発見、気づきを重視する
- ☐ 調査やインタビュー、ディスカッションを取り入れる
- ☐ 子どもたちが関心を持ち、体験し、探求し、ふりかえる、といったストーリー性をもたせる
- ☐ 総合的な学習の時間や特別活動と教科学習を連動させる
- ☐ 地域の問題や身近な課題を掘り下げ、その解決策やよりよい未来の姿を描く
- ☐ 多様な立場、世代の人たちと一緒に学びあう

このような人や環境を活かしています

- ☐ 地域の自然や文化施設、社会教育施設などのフィールド
- ☐ 大学やNPO、企業、農家、商店主、保護者などの地域の大人たちや専門家
- ☐ 地域のNPOや自治会などが行う活動や行事
- ☐ 他校種（幼、小、中、高、大）との連携
- ☐ 地域の人や多様な組織とのつなぎ役となるコーディネーター

今後、多摩市の各校で「持続発展教育（ESD）」を普及促進していく上で、文部科学省日本ユネスコ国内委員会により加盟が呼びかけられている「ユネスコスクール」のネットワークを活用することがひとつの有効な手段であると考えられます。多摩市では各校の積極的なユネスコスクールの登録を応援します。

ユネスコスクールとは？

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校です。世界180の国・地域で8500校以上のユネスコスクールがあります。（2010年3月現在）

ユネスコスクールの活動目的

- ユネスコスクール・ネットワークの活用による世界中の学校と生徒間・教師間の交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと
- 地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこと

ユネスコスクール加盟のメリット

世界のユネスコスクールの活動情報の提供、世界のユネスコスクールと交流する機会の増加、米国・韓国・中国等海外との教員交流、世界の教育事情、国連機関の活動の把握、ESDのための教材・情報の提供、ユネスコスクール HP を通じた情報交換、ワークショップ・研修会への参加、国内の関係機関との連携強化 等

参加資格

- 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校は、国公立を問わずユネスコスクールに加盟することができます
- ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要です

問い合わせ先

ユネスコスクール事務局

（日本ユネスコ国内委員会事務局・文部科学省国際統括官付）

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

TEL: 03-5253-4111（内線3402） FAX: 03-6734-3679

Email: jpnatcom@mext.go.jp ウェブサイト: <http://www.mext.go.jp/unesco/>

ユネスコスクール・ESD 関連リンク集

日本ユネスコ国内委員会・文部科学省	http://www.mext.go.jp/unesco/
ユネスコスクール公式サイト	http://www.unesco-school.jp/
財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）	http://www.accu.or.jp/jp/
社団法人日本ユネスコ協会連盟	http://www.unesco.jp/
NPO 法人日本持続発展教育（ESD）推進フォーラム	http://www.ellesnet.co.jp/home/esd/
NPO 法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）	http://www.esd-j.org/

お問い合わせ先

多摩市教育委員会

東京都多摩市関戸6丁目12番地1 | TEL : 042-375-8111 (代表)

NPO 法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議 (ESD-J)

東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山 B2F

E-mail : admin@esd-j.org | TEL : 03-3797-7227

